

途上の『二都物語』

藤井晶宏

ディケンズ(1812-1870)の晩年の作品である『二都物語』(1859)には、道や通りのイメージが、作品全体に繰り返し現われているという指摘がある¹。元来ディケンズにとって道や通りという空間は、重要な意味を持つ空間であり、それも内在的とも呼びたいほど深く根付いている。『二都物語』においても、その中心的な部分を道や通りが貫いているといえるだろう。

詳しくはこの論の中でも徐々に明らかになっていくだろうが、誰でもすぐ気がつくことは、この小説の最も中心的な事件である革命が、文字通りにも比喩的にも、道や通りと結びついていることである。文字通り、群衆は通りを通行することで革命を始めるし、その後も、常に通りは群衆によって満たされている。カルマニョールを踊る群衆も通る。囚人を乗せた車も処刑台に向かって走っている。また比喩的には、チャールズ・ダーニーが、革命家たちに捕らえられた元召使いを救うためにロンドンを後にするとき、その後革命に巻き込まれることを暗示するように「重苦しい通りの重苦しい霧の中に出てきた²」(第2巻第24章、以下 24と省略)と書かれている。さらに、通りを舞台にした革命の指導者ドファルジュ夫人は、革命が起きる前、それを「途上にあって(on the road)近づいてきている」(16)と言ったり、自らのことを「初めから通りにいた」(14)という暗示的な言葉で表現したりしている。

しかしこの論で注目したいのは、革命そのもののことではなく、革命と同様に通りと強い関係を持ったある人物の方である。青年弁護士シドニー・カートンがその人物である。彼は『二都物語』そのものが、彼の物語として読まれることもあるほどの重要な人物として知られている³。彼が重要な人物と一般に考えられるのは、彼が革命に関わって印象的な活躍をみせるからである。彼は小説の後半で革命に関わり、愛する女性のために自分の命を犠牲にして死ぬ。そして断頭台で命を落とすとき「予言者のような」顔で輝かしい未来のヴィジョンを見る(15)。まるで通俗的な小説だが、確かに小説の主人公にふさわしい活躍ぶりではある。

ところが革命以前の彼はといえば、能力がないわけではないが、目的も勤勉

さも持たず酒浸りの生活を送る、いわば人生の落伍者だった。ただ通りとの結びつきは強い男性だった。ドファルジュ夫人の言葉を借りると、彼も「初めから通りにいた」のだ。青年期特有の精神的な彷徨を象徴するかのように、彼は何度も通りを歩き回る姿を我々に見せる。例えば、「暗い通りを歩いていた見捨てられた彷徨者」(20)と呼ばれたり、彼本人も「通りを這い回るどんな卑劣漢」(13)よりも価値のない人間、と自分のことを表現したりしている。ついでに言えば、彼はルーシー・マネットという女性に関心を寄せるが、そのことが「彼女の家を巡る通りへの関心」(13)として表面化し、結局幾夜となく彼女の家の周りの通りを彷徨するしかなくなる男だった。

この論は、このシドニー・カートンという青年を、革命に関わる以前から彼に特徴的だった通りとの結びつきから考えようとするものである。

1

カートンについて見る前に、廻り道になるのを承知の上で、『二都物語』において道や通りがどのように描かれているか見ておきたい。まず道や通りは、開放的な空間として存在している。明確に始まりや終わりで区切られないという意味でそうであると同時に、基本的に誰でも通行できる空間であるという意味でも開放的である。だから通りで起きた出来事には、何であれ人々が参加することが可能である。革命がこの開放的な空間を舞台にすることは、そこに誰でも参加できることを意味することになる。

革命が起きる前の、ワイン樽が割れてワインが流れ出す有名な場面も、パリのある通りで起きる。そうして、そこには様々な人が集まってくる。

一つの大きいワインの樽が通りに落ちて壊れた。(略)

近くにいた人々は、仕事やぶらぶらしているのを一時中断して、その場所に走ってきてはワインを飲んだ(5)

しばしば指摘されるように、この場面は後に起きる革命を暗示している。しかしそれは、血を思わせる赤いワインに人が群がり、それをむさぼるように飲んで、虎のように口のまわりを真っ赤にする人が残酷さを連想させるためや、壁

に赤いワインで「血」という文字を書きつける（ 5 ）からだけではない。通りがその開放的な性格をよく示しているからでもある。

一見革命と直接関係がなさそうな英国においても、通りがその開放的な性格を見せる出来事が起きている。あるとき、フリート・ストリートに葬列が通りかかる。この葬列は、スパイが死んだことによるものだということが伝わり、どこからともなく人々がそこに群がってくる。彼らはそれ以上詳しいことは知らないのだが、そのことは彼らがそこに加わる何の障害にもならない。彼らは愛国心といったものでゆるく結ばれていて、スパイの死を喜ぶことができる。

このエピソードでもう一つ忘れてならないのは、ジェリー・クランチャーという男の存在である。彼は一方で夜な夜な死体盗掘をやりながら、もう一方でテルソン銀行の使い走りのようなことをしている。また、息子といつもテルソン銀行の窓の下に椅子を持ってきては、銀行を背にして座り、眼前のフリート・ストリートのいつまでも涸れることのない人の流れを「川の流れを見つめるように」横から眺めている（ 14 ）⁴。その彼は道端からこの葬列を見つけると、群衆とともに、いつのまにかその葬列の馬車の中に乗り込んでいる。

たちまち馬車は中に八人、外に十二人でいっぱいになった。（略）こうしてすすんで馬車の中に乗り込んだ者の中にジェリー・クランチャー本人がいた。（ 14 ）

ここでも通りはその開放的な性格を見せて、多様な人の参加を許している。しかしここにはもう一つ大切なことがある。彼がこの葬列を喜んだ理由も、馬車に乗り込んだ目的も、他の群衆と異なっていたことだ。この中で彼だけが死体盗掘の目的を持っていた。が、その目的の違いそのものが問題なのではない。むしろ、幾らかの目的の違いにもかかわらず、通りの同じ出来事の中に許容されていることのほうが肝心なのである。通りは人々をゆるく結びつけることはあっても、厳密に一つの規則に縛ることはない。そこは全てが同じになる場ではなく、常に多様さが許されている。

面白いのはクランチャーが周囲とのずれを持ったまま葬列の中心にいう面が、この出来事を革命に結び付けてくれることだ。というのも、意外なよ

うだが、革命でもその中心でドファルジュ夫人という存在が、周囲とのずれを生じさせているからである。

夫人は、群衆を先導していながら、民衆を一部の上流階級の抑圧から解放するという以外に、極めて個人的な目的を持っている。数十年も前に彼女は、自分の姉と兄を領主のサン・テヴレモンド侯爵家の兄弟に殺されるという体験をしていて、個人的な恨みを侯爵家に対して抱いていた。苦しむ民衆を解放する象徴的な事件としてのバステューユ監獄襲撃も、彼女にとっては、そこに以前閉じ込められていたアレクサンドル・マネットが書いた手記を、その隠し場所から手に入れるためにだけ意味を持っているかのようである。マネット氏の手記には、かつて彼女の兄や姉に加えられた、サン・テヴレモンド達の非道な行為が記されていたからである。彼女はその手記を証拠として、一度別の件で助かったチャールズ・ダーニーをサン・テヴレモンド一族の一人として再び裁判にかけ、死刑判決に追い込むが、それもどちらかといえば個人的な怨恨の結果である。その時すでに、他の革命の群衆にとって、祖国を捨てていたダーニーは必ずしも殺さなければならない敵ではなかった。現にダーニーが直前に別の裁判で無罪になったときなどは、大喜びした通りの群衆が彼を肩の上にのせて、妻ルーシーの待つ家へと連れていくほどだった(6)。

彼らは、フリート・ストリート上の群衆同様、厳密な規則に拘束されているわけではない。彼女と群衆とのずれは、多くの人間が革命を進行させていく妨げになるほどではないが、革命という大きな流れの中で見え隠れしている。後にダーニー（実際はカートンが身代わりになっていた）が断頭台上上がったときにも、単なる23番であり、22番のお針子娘の次でしかない。そこには、ドファルジュ夫人が侯爵家に対して抱いていた恨みの強さに対応するものはない。

多様な群衆を抱える通りは、その多様さゆえにある特定の個人の思いを超える部分を常に持つことになり、場合によってはその個人の思いを裏切る可能性を潜在的に秘めてもいた。

ではない。それは、バステューク監獄が封建領主による抑圧的な支配をもっともよく具体化したものだったからであろう。監獄が封建制を表し得るのは、閉鎖空間であることによって、コントロールできない外部が遮断され、善し悪しはともかく一つの意志（例えば封建領主）の下で秩序が成立することを表し得るからだ。こうした監獄が、通りと正反対の性格を持っていることは説明を要しないだろう。多様な人が流れ込み通行する通りは、監獄つまり封建的な体制ともっとも相容れないものだった。現に『二都物語』においても、封建的な世界は通りを通じて崩壊している。例えば、サン・テヴレモンド侯爵を殺した男。彼は、侯爵を殺す直前ともあろうに疾走する侯爵の馬車の下にぶら下がることによって、通りを通行していた（ 8）。これ以外には、貴族の屋敷に火をつける男たち。彼らも「旅行者」（ 23）として、国中を歩き回っていた。もちろんバステュークを襲撃した、通りを進行する群衆のことも忘れてはなるまい。

多様な人の流れを許容する通りは、革命という形により抑圧的閉鎖的な封建制を打ち破り、新しい時代への扉を開きはしたが、このことによって通りをプラス価値を持つものと即断するわけにはいかない。というのも『二都物語』には通り＝革命が脅かしている閉鎖空間が、監獄以外にもあるからである。その一つがディケンズの読者にはプラス価値を持つものとしてなじみのある、家（家庭）である。家もまた、コントロールできない外部を排除することによって一つの秩序を保っている。外部から自律した世界を、炉辺の天使ともいうべき女性が統括することを理想とする、産業革命後に生まれた家の姿は、もともとどこか上で述べた監獄に似ている⁵。

『二都物語』では、ソーホーにあるマネット家がディケンズらしい家の例である。周囲には人が行き交う通りがあり、そこを歩く人の足音が家の中によく聞こえるようになっていて、内部にいるものを脅かしている。ディケンズ的ヒロイン、つまり家庭の天使的なルーシーはその足音がいつか自分たちの生活に入ってくるのではないかと不安を感じている。この不安が全般的な外れでないことは、そのすぐ後に語り手が、間もなく通りの人々が彼女たちに襲いかかるであろう（ 6）と告げ、マネット一家が革命に巻き込まれることを暗示していることから明らかである。

ついでに言えば、同じことが革命のなかで、テルソン銀行とそこを取り囲む高い塀によって遮られた通りとの間で繰り返されている。テルソン銀行は監獄でも家でもない。しかし英国にあるテルソン銀行が、若者をその中に入れると年老いるまで外に出さないといわれていたことは(1) マネット医師を18年後に老人として吐き出したバステューコと同じく、銀行が監獄的空間でなり得ることを示している。そのパリのテルソン銀行でローリー氏は、ルーシーのように通りから来る気味悪い音に脅かされている(2)。

多様な人の流れを許す通りは、プラスであれマイナスであれどちらか一つの価値を表したりはしない。それはどんなものにもプラス面とマイナス面があるという一般論ではない。一つの意志の下に秩序立った世界が成り立ちうる閉鎖的な空間があれば何であれ、破壊し開放し、初めも終わりもない世界へと吸収するだけだ。監獄(封建制)であるか家であるか銀行であるかは問題ではない。(革命勃発後に、新しい秩序を構築するというより、処刑を延々と繰り返すだけになったことは、その一つのあらわれだろう。)

3

上の章で革命の舞台としての通りと監獄(閉鎖空間)との関係を中心にみた。が、多様な人の通行を許容する通りは、まさにその多様性のために、常に通り=革命として機能するものではない。『二都物語』の中で通りに属しながら、なおかつ革命に関わらない、最初に名を挙げたカートンのような存在があるからだ。彼が通りに属しながら革命に属さないことは、上で触れた、革命を暗示する多くの足音が家の中に響きわたり、ルーシーが不安を感じると告げたとき、彼はルーシーと一緒に家の中にいたし、さらに革命下のパリにやってきたときも、彼がまず姿を見せるのは、ローリー氏のもと、つまりテルソン銀行だったという事実にもあらわれている。彼の属しているのは、あえて示せば通り 革命ということになるだろう。

この通り 革命という側面はこれまでも存在してはいたのだが、それが通り=革命を押しつけるように作品の前面に現われてきたのは、ルーシーの命をめぐって、ともに通りに属しているカートンとドファルジュ夫人の二人が争ったのがきっかけだった。結局はカートンが夫人の裏をかくて、ルーシーの命を救

うことに成功するのだが、ここで問題なのは、通り 革命がなぜこのルーシーの命をめぐる争いの中であらわれてくるかである。それには、ルーシーの命を奪おうとするという夫人の意図が、通りに属する彼女にとってどういう意味を持っていたかを見ておかなければならない。

「なるほど、なるほど」ドファルジュが言った。「しかし、どこかで止まらなければならない。結局、問題はどこで止まるかだ」

「絶滅したとき」夫人は言った。(12)

これは侯爵家への復讐について夫妻が話したもので、夫人の答えはテヴレモンド一族が絶滅したとき、つまり具体的には、侯爵の甥であるダーニーの妻ルーシーの命を奪ったときに復讐が終了することを意味している。

夫人の復讐心は夫すらついていきかねるほどの、極めて個人的な思いに基づいていて、必ずしも革命全体のそれに一致していないことは既に述べた。注目したいのは、このルーシーの命を奪うという目的(end)が、夫人に明確な終着地点(end)を与えていることだ。夫人にとって大切なのは革命そのものの終わりではなく、自らの目的が終わりになる部分だけだ。それは、この革命という大きな流れの中に自分にとって意味ある領域を確定し、それを枠で囲い込むようなことだった。言いかえると、終わりのない革命=通りという地に、独自に完結した図を描くことでも形容すべきことだ。ドファルジュ氏の言葉にも感じられるように、既に革命が終わりを失っている以上、人為的に区切る以外に終わりはどこからもやっこない。その意味で彼女が終わりを設定すること自体に問題があるわけではない。ただしそのことによって、彼女は彼女一人の思いにのみ基づく閉鎖された図(監獄)を持つとしたことは事実である。しかしその閉鎖された図こそが、なにより通りの性格に反したものであることは繰り返すまでもないだろう。

当然というべきか、ドファルジュ夫人の試みは失敗した。ルーシー宅にいたミス・プロスと格闘したときピストルが暴発して、夫人が命を落としたからではない。通りが夫人の描く図(監獄)の完成を許さなかったのである。夫人が単身ルーシー宅へ出かけたとき、既にルーシー一行は馬車を走らせいちはやく

逃げ去っていた。多様な人の通行を許す道や通りが、彼女たちの通行をも許したからだ。しかし、それだけではない。上で引用したドファルジュ夫妻の会話を耳にして、ルーシーたちが逃げられるように手筈を整えたカートンの行為そのものが、彼が属している通り 革命を体現していたのである。

このように、通りは革命を通じて監獄を破壊したが、そのことは通りが常に革命の味方であることを意味しない。通りは、閉鎖された領域であれば誰が作ったものであっても、それを無効にする機能そのものとしてある。これが『二都物語』における通りなのである。そうしてそこにカートンも属しているのである。

4

これでようやくカートンについて考える用意ができた。まずは、彼同様通りに属していたドファルジュ夫人が参考になる。彼女は、失敗に終わったとはいえ、図を描こうと試みることができた。繰り返しになるが、それは彼女が個人的な目的=終わりを持っていたからである。しかし、同僚のストライヴァーに活力も目的も持たないと評された(5)カートンにとって、通りに生きるとは彼女よりも困難なことだった。一般に若いことが将来に無限の可能性をもつものとして肯定的に語られるのは、彼らが描くべき夢を持っている、或いは持つことができるという前提があるからだ。が、彼は一般的な若者と違って、可能性はあっても描くべき夢がないのである。それは、地はあっても図がないといえいいだろうか。あるときロンドンの街中で、「砂漠」や「荒野」(5)と呼ばれた殺伐とした世界が彼の目の前に現われるが、これはまさに図のない地の世界そのものである。またそれが、潤いのない「砂漠」などと呼ばれることが、カートンの置かれていた状況の過酷さをよく表している。

しかし若さの残酷なところは、このようにどんな目的も夢も持たなくなった彼にも、突如夢を描かせてしまうところにある。

[カートンは]一瞬、目の前に広がる荒野に、すばらしい野心、克己心、そして忍耐の屋気楼を見た。このヴィジョンの美しい都市では幻想的な回廊がいくつかあり、そこから愛や美の女神が彼を見つめていて、庭園には命

の果実がよく実りぶらさがっていて、希望の水が彼の目の前できらめいていた。一瞬の後、全て消えてしまった。(5)

彼が見たものが「屋気楼」と呼ばれているように、それは現実に対応するものを持たず、消えていくよう運命付けられている。輝かしい夢が一瞬で消え去るのを見ることは、一切夢を見ないことよりつらい体験である。この後帰宅し、服を着たままベッドに身を投げ涙で枕を濡らす彼を、語り手はこう表現している。

優れた能力と感情を持ちながら、それらをきちんと使うことができず、自分を救うことも幸福にすることもできず、自分を荒廃させている病のことはよく知っているが、あきらめてその病が自分を蝕んでいくにまかせている男(5)

ここにあるのは、もはやどうすることもできなくなった若者の悲しい姿である。

彼がこのような状態になってしまうのは、第一にはヴィクトリア朝の多くの人たちのように富や名声を求める道から落ちこぼれ、もはや全力を傾ける目的がないことである。しかし、ドファルジュ夫人の例を見てきた我々は、そこにもう一つ理由を付け加えることができるだろう。つまり彼にとって目的を定めることは、夫人の場合と同様、通りに個人的な思いに基づく閉鎖された図を描くことに他ならず、しかもそれは通りによって無効にされるしかない。これではまるで一瞬で消えてしまう「屋気楼」をあえて見ようとするにしかない。彼の抱えている問題にはこうした難しさも隠れている。

このあと彼は革命に関わる。ル・シーの夫のダーニーが革命側に逮捕されたあと、ルーシーたちがパリにやってくると、カートンも後を追うようにやってきた。やがてダーニーは、ルーシーの父親マネット医師をかつて無実の罪でバステュークに20年近くも閉じ込めたテブレモンドー族の一人として、死刑を宣告される。カートンは、ダーニーが閉じ込められている監獄に入り込み薬でダーニーを眠らせると、顔が似ていることを利用して、衣服を交換するとダーニーになりすまし、ダーニーをルーシーたちと逃がし、自らは断頭台で命を落

とす。

いったん革命に関わった彼は、英国で通りをうろついていたころには考えられなかったほどの活躍ぶりを見せている。しかし彼の変貌ぶりは、パリにやってきた当初から周りの者が気づくほどだった。カートンはパリにやってくると、ダーニーが閉じ込められている牢の牢番をするジョン・バーサッドという男をつかまえ、この男とある交渉をまとめる。その内容は、カートンが望むときにダーニーに会えるようにバーサッドが手筈を整えるというものだった。この交渉を終えたあとカートンはローリー氏と次のような会話を交わしている。

「しかし、彼[ダーニー]に会っても」とローリー氏が言った。「法廷の場でうまくいかないと、彼を助けることはできないだろう」

「助けられるとは言いませんでしたよ」(9)

この段階からすでに、ダーニーに助かる道がないときに、カートンがダーニーの身代わりで死ぬ意志を持っていたことがわかる。カートンは自分の目的(end)を、彼の生命の終わり(end)でもある死に定めたのである。このすぐあと年老いたローリー氏が話した、人生の終わりに近づくにつれてそれまで忘れていた昔の若かったころの思い出に心をうたれるという話に、カートンが共感を示すことができる(9)のも、彼の前方にはっきりと死という目的=終わりが見えていたからである。ローリー氏と別れたあとパリの街を歩く彼の態度についても、明らかに変化が見られる。

それは向こう見ずな態度でも(略)怠惰さや反抗を表したものでもなかった。それは、さまよい苦闘して道に迷ったが、ついに自分の道に出くわしその終わりを目にした、疲れた男の落ち着いた態度だった。(9)

上の引用で「終わり」と訳したものは原文では end で「目的」でもある⁶。革命下のパリで彼はようやく目的=終わりを見つけたのだ。しかし、革命の中で見出されたこの目的=終わりも、革命と無縁であることは言うまでもない。彼にとって大切なのは、自分の道であり、その終わりなのだから。

革命は彼の歩く道に交差してくるエピソードにすぎない。このことは、革命が彼にとってあくまで副次的なものでしかないことを示唆する。奇妙に聞こえるかもしれないが、ダーニーの身代わりに断頭台で死ぬことも、革命そのものとは関係がないこととして考えるべきだ。彼は革命には関心をもっていなかった。幾らかでも関心を寄せていたものがあるとすれば、それはルーシーである。従って、彼の死はルーシーへの愛ゆえの自己犠牲の形をとっているが、彼女がカートンの目的＝終わりだったともいえない。カートンは彼女の家の周囲の通りをうろつくほど、彼女に惹きつけられていたのは確かで、だから彼女の周りをうろついているうちに、引っ張られるように革命下のパリに姿を現わしたのだ。が、それは彼の目的＝終わりを手に入れる絶好の機会を準備したとはいえるが、彼女が目的＝終わりそのものであることを意味しない。

目的＝終わりを定めることは通りに個人的な思いに基づく閉鎖された図を描くことだが、所詮それらは通りに無効にされるしかないことを、彼が何もすることもできない理由として挙げておいた。そうしてそれはあえて「屋気楼」を見るようなことだとも書いた。そのこと自体は、変わっていない。にもかかわらず、彼がこのときに限り行動できたのは、やはり目的＝終わりが死だからである。言いかえると、彼は処刑されることにより、「屋気楼」が消えるのを見なくてもすむということであり、その後の砂漠のように殺伐とした地の世界を延々と生きなくてすむということである。安心して彼は、目的＝終わりに突き進めるのである。

彼が死ぬことによって消えるのを見ずにすんだ「屋気楼」といえば、彼が断頭台上で見たとされるヴィジョン以外にあるまい⁷。小説の最後という特別な位置に置かれているが、このヴィジョンを特別な洞察を含むものとして読むより、「屋気楼」がもう一度現われたと考えた方がいい。なぜなら、輝かしい未来を告げるそのヴィジョンは、いかなる客観的な根拠にも基づいていないし、現実に対応してもいないのである。

詳しく論じる余裕はないが、そのヴィジョンの内容について次の二つの点に触れておこう。一つは革命家たちが死んだ後、「美しい都市と輝かしい人々」(15) が生まれてくること。もう一つはカートンのことを覚えている人が、その記憶を語り伝えていくこと。しかもそれは、ルーシーにカートンと同

じ名を持つ男の子が生まれ、その子が成長して自分の子（その名前もカートンと同じ）を断頭台のあったところに連れてきて、カートンの思い出を語るというものである。

彼が「予言者のような」顔をして見たこのヴィジョンがいかに感動的であろうと、そのことは「予言」が現実のものとなる理由にはならない。『二都物語』連載当時（1859）現実のフランス革命が終わったあと、カートンの「予言」通りに「美しい都市と輝かしい人々」が生まれなかったことは、既に周知の事実であった⁸。また我々が知る限りにおいて、カートンの思い出を語るのはルーシーの息子ではなく娘である。カートンが想像した通りの断頭台のあったところではないが、年老いたルーシーの娘が自分の孫たちにカートンの思い出を語る遠い未来の姿を、カートンのヴィジョンの前にわずかではあるが我々は見ている（ 11 ）

しかし、これらの食い違いは彼にとってどうでもよかっただろうし、我々にとっても実はたいした問題ではない。肝心なのは、開放され殺伐とした地の世界に耐えられず、自らを閉じるように死という終わりを定めたこと、そうしてそうしながら彼が、このときになお終わり以後に延々と続く世界をヴィジョンとして思い描こうとすることだ。それは彼が何らかの形で終わり＝目的を必要としながらも、その終わりが所詮は一つの図に過ぎず、無効にされる以外にないことを自ら示しているかのようだ。常に終わり(図)を無効にするものを通りと呼んできた我々は、カートンがこのときにも通りの機能を繰り返し体現しているというべきかもしれない。しかし、我々にとって興味があるのは、このときに限り、終わりの無効がかえって明るいヴィジョンをもたらしていることである。

カートンは処刑になる少し前、夜のパリの通りをさまよい歩くうちに、昔父親が死んだときに墓の前で読まれた聖書の「我は蘇りなり、命なり」という文句を思い出していた（ 9 ）。これがカートンにきっかけを与えたようである。夜が明けて彼はセーヌ川の堤に立って川を横から見つめながら、再度この文句を口にした。そのときの彼の視線の先にある川の表面には、いくつかの模様(図)が現われては消えていた。クランチャーについて触れたとき、「川の流れを見つめている」（ 13 ）ように通りを見つめていたことに触れておいたが、通り

=川となると、川面に繰り返し現われては消える図は、通りに描かれる図(目的=終わり)の運命を暗示していることになる。

カートンがこの様子を見ながら「蘇り」を口にしたということは、終わりが無効にされることが、肯定的な意味を持ち得ることに気づいたということである。「蘇り」とは、死=終わりを無効にしながら、それに極めて肯定的な意味を与えるものだからである。通りに属するものとしていかなる目的=終わりも無効にされるしかないが、「蘇り」は、通りの性格にも逆らうことなく、彼が「もっとも平和な人の顔を」(15)をして死ぬことをようやく可能にしたことになる。

ただし彼の「蘇り」が可能なのは、彼の思いの中においてだけだということ、最後にあらためて付け加えておく必要があるだろう。いかにその思いが切実であつたり感動的であつても、意地の悪い言い方をすれば、それは観念上の操作に過ぎないのであり、彼の外の現実からは大きく後退している。川を横から見て「蘇り」を口にするカートンのそのときの姿勢が、通りを横から見ていた resurrection man(死体発掘人)のクランチャーと類似していることもこの事実を暗示している。二人は resurrection = 「蘇り」という共通項をめぐって、ともにそのパロディしか演じていないのである⁹。

注.

- 1 . 例えば G.Robert Stange は、'The pervading image of the road...runs through the whole book.'と書き、そのことに触れている。'Dickens and the Fiery Past: A Tale of Two Cities reconsidered,' reprinted in *Twentieth-Century Interpretations of 'A Tale of Two Cities'*, ed. Charles E. Beckwith (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1972), p.73.
- 2 . Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (1949: Oxford: Oxford University Press, 1987). をテキストとして使用した。以降引用は巻数と章数のみを示した。
- 3 . Lawrence Frank が 'A Tale of Two Cities has...been Sydney Carton's novel.' という通りである。 *Charles Dickens and the Romantic Self*

- (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1984), p.124.
- 4 . ここ以外でも、通りを通る群衆が水の流れの連想を誘う個所がある。ダーニーが一度無罪になったとき、通りの群衆が彼をとりまいて大騒ぎする場面に次のような描写を見ることができる。‘the very tide of the river on the bank of which the mad scene was acted, seemed to run mad, like the people on the shore.’(,)
 - 5 . 『二都物語』のすぐ前の作品『リトル・ドリット』(1855-57)においては、マーシャルシー監獄が同時にドリット家の家でもあった。
 - 6 . J. M. Rignall もこの end に goal と conclusion の二つの意味を読み取っている。‘Dickens and the Catastrophic Continuum of History in *A Tale of Two Cities*,’ reprinted in *Charles Dickens’s ‘A Tale of Two Cities’* (Modern Critical Interpretation) ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p.130.
 - 7 . 結論は全く異なるが、カートンの二つのヴィジョンの関係に気づかせてくれたのは、Joseph Gold, *Charles Dickens: Radical Moralist* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1972), p.215.である。
 - 8 . 革命が必ずしもカートンの予言通りに終わらなかったことは、Chris R. Vanden Bossche, ‘Prophetic Closure and Disclosing Narrative: *The French Revolution and A Tale of Two Cities*,’ *Dickens Studies Annual 12* (1983), p.211.
 - 9 . クランチャーがキリストのパロディであることは、Joseph Gold が前掲書で触れている。P.237.